

講演 3

経済環境変化に対応した産地の現状

JA 筑前あさくら

営農経済担当常務理事 林 俊 幸 氏

皆さん、こんにちは。JA 筑前あさくらの林と申します。

今日は国際セミナーということで非常に大きい話ですが、私がやっていることは、土から農産物ができて、そのできた物を選果・選別し、市場にお届けするというような本当に現場の仕事です。そういったところを簡単に説明させていただきたいと思っておりますので、あらかじめご了承をお願いいたします。

JA 筑前あさくらの概況ですが、福岡県の中央に位置し、朝倉市を真ん中に、筑前町を西、東に東峰村の3市町村が管内となります。福岡からほぼ30キロ圏内にある農村地帯であります。(スライド2)

スライド3枚目の写真は、朝倉市には日本最古の実働する水車として有名な三連水車があり、筑後川の山田堰で取水した水が堀川用水に流れ、652ヘクタールの農地を潤しております。その堀川用水から1基の三連水車と、2基の二連水車を回し35ヘクタールの水田を潤しております。

この山田堰ですが、アフガニスタンで凶弾に倒れました中村哲医師が、現地の灌漑事業の参考にしたものです。現在は山田堰を望む広場に中村哲さんの肖像と言葉を刻んだ記念碑が建てられております。時間がありましたら、ぜひ朝倉に来てください。

JA 筑前あさくらの主な農畜産物ですが、普通作では米・麦・大豆、野菜では博多万能ネギ、



イチゴ、紅タデ、キュウリ、ナス、トマト、アスパラガス、果樹では柿、梨、ブドウ、イチジク、モモ、スモモ、キウイフルーツなどがあります。その他、鉢花、切り花、肉牛など、いろいろな農畜産物が生産されている農業地帯です。

スライド5枚目のグラフは、穀物需要の上昇などから、肥料の需要が高まっており、世界的に肥料原料の価格が大幅に上昇しているということで、2倍から3.5倍に上昇したという状況であります。これは、コロナですとか、ウクライナへのロシアの侵攻で、こういったことになっております。

スライド6枚目は、日本は、約90%の肥料を輸入に頼っております。そういった中、植物で利用される窒素、リン酸、塩化カリという肥料の3大要素があります。尿素と書いてありますが、これが窒素です。これが中国、マレーシアが主でありまして、中国からの調達が困難に

林 俊 幸

なっています。真ん中のリン安は中国がほとんどであり一番厳しいのがこのリン安でございます。それから塩化カリは、ロシア、ベラルーシということで、こちらも45%程度が困難になっているという状況でございます。

そのほかにも温暖化ですとか、労働力不足など、非常に現在の農業は厳しくなっているということでご報告したいと思います。

スライド7枚目の写真は野菜の苗です。日本の食料自給率はカロリーベースで38%とされていますが、基となる資材などはほとんどが輸入に頼っています。

東京大学大学院の鈴木宣弘（のぶひろ）教授の著書である『世界で最初に飢えるのは日本』では日本の野菜の自給率は80%ですが、野菜の種は90%を輸入に頼っている。種を計算に入れると真の自給率は8%しかないと記されています。

スライド8枚目の写真は卵ですが、日本の鶏卵の自給率は97%ですが、鶏の主たる餌であるトウモロコシの自給率はほぼ0%です。これが実態です。38%という自給率に種と肥料などの海外依存度を考慮したら日本の自給率は今でも10%に届かないくらいであると記されています。非常に危険なことです。

そういったことで、国内で何とか肥料を作ろうという動きが出てきております。地域資源を生かした肥料を作っていくということで、食料と同様に、資材についても国産が大事だという思いが生まれてきております。生産材の高騰に対し、国、県、市も今いろんな対策を講じてくれています。これがずっとというわけにはいかないと思います。そこで、福岡市とJAグループ福岡が協力しまして、安価で安定的に生産される肥料として、福岡市の下水処理場で回収されるリンと、JAの堆肥を有効活用した有機入肥料の「eグリーンシリーズ」を開発しております。この有機入肥料で、今までの肥料が

例えば3,450円、これがこの仕組みでやりますと、2,770円ということで、約20%安くなるということで、こういった取り組みを今後進めていこうと考えているところであります。

新しい肥料について、すぐ実用化は難しいと思いますので、いろんな現場で試験をやっております。柿、梨、麦、あるいはその他、大豆等で試験をやりながら、もう今年から実用化するというところで進めているところでございます。（スライド10）

JAは作付け前に土壌分析を行うことを推奨しております。土壌の状態を調べることで、補うべき成分に絞って肥料を投入できるため、肥料の使用量削減につながります。不安定な国際情勢や円安の影響で肥料原料の価格が高止まりする中、地元原産の肥料を適切に使用していく取り組みは、農家を支えるだけでなく、循環型社会の形成にもつながると考えております。

JA筑前あさくらには堆肥センターがあり、年間約4千トンの堆肥を製造しております。

これまで堆肥は完熟が良いとされてきましたが、C/N（炭素と窒素の比率）が20%～25%が良いと言われていました。植物が良く育つ土壌の団粒化には微生物が関係しますが、完熟になると有機質がなくなり微生物のエサがないので、有機農業の専門家の間では有機質がある程度残った未熟堆肥の方が良いと言われるようになりました。

そこで、ある先生にご相談しまして、今、隣のうきは市でオーガニックビレッジ宣言をして、有機農業の実施を始めております。そこで、うきは市、隣のJAにじ、JA筑前あさくらで、有効堆肥の生産の検討を始めております。この堆肥を使うことで、健康で品質の良い農産物を生産し、農家所得増大や、国が示す緑の食料システム戦略に対する取り組みへ結びつけていきたいと考えております。

このほかにも農業の生産現場での問題点があります。ここでは、この問題点について触れて

みたいと思います。

まず1つ目が、高齢化に伴う労働力不足です。イチゴやアスパラガスは、今までは農家が自分で箱詰めをして持ってきておりました。それをJAで共同出荷していたのですが、パッケージセンターをつくりまして、選別やパック詰めをJAで行うようにしております。できる限り、パッケージセンターを活用していただき、生産者には生産の拡大に力を入れていただき、所得増大へつなげていただきたいと思いますと考えております。

これによって、2番目の多様に富む消費者ニーズへの対応についてもさまざまなニーズに早く対応できるようになったと思っております。

3番目、新規就農者の育成についてですが、高齢化による生産者の減少に対し、県や市町村にご協力いただきまして、平成29年に新規就農センターを立ち上げております。これによって、新規就農者の育成を行っているところでございます。

また、同地区平成29年の九州北部豪雨で被災しておりまして、この被災した農家の経営再開を支援するため、JAが農業経営を行って、JAファーム事業によってアスパラガス栽培を開始しております。3年間実施しまして、9名のアスパラガスの生産者が誕生しております。ファーム事業とは、JAがアスパラガスハウスを建てまして、そこで栽培してくれる人を募集します。そして、JAはこの方たちをつきつきり2年間指導しまして、作業も一緒に行って栽培技術を習得していただき、3年目に経営移譲をするというものです。

スライド14枚目の写真が福岡県産のイチジク「とよみつひめ」を選別し、パッケージしているところです。手作業にたよるところも多いですが、機械でできるところは機械、作業員でできるところは作業員ということで、なるべくコ

ストがかからないやり方を現場としてはしております。

スライド15枚目の写真がアスパラガスの重量選別の様子です。農家から持ち込まれたものを、このように選別して、市場に出荷をしております。

スライド16枚目のグラフは先ほど説明しました新規就農センターですが、平成30年度に1名、令和元年度に3名ということで、令和4年度までに14名の方が農家として独立されました。地区外から来られている方もおります。作物名はピンクがイチゴ、緑がアスパラ、その他については、万能ねぎやナスといったものでございます。

先ほどのファーム事業ですが、これは令和元年から2名、次の年が4名ということでやりまして、現在10名（アスパラ9名、スモモ1名）の方が農家になられたということです。このイチゴなり、アスパラについては、今までいろんな品目が右肩下がり生産が減っておりましたが、この2品目については、おかげさまで販売高は増えてきたという状況であります。これをますます伸ばしていきたいと考えております。

スライド17枚目は新規就農センターでイチゴの研修をしている状況が、『日本農業新聞』に載ったところです。

スライド18枚目につきましては、東部の山間地が復興した後に、果物の産地でしたので、産地をまたよみがえらせたいという思いで、フルーツファーム事業ということで立ち上げております。果物は、未収益期間といいまして、野菜と違って、植えてすぐには収穫ができません。しかしながら、果物の中でも一番それが短いスモモを取り上げまして、新しい栽培方法で、このフルーツファーム事業を試験的にやりまして、将来的には産地化を図りたいということでやっております。新しい栽培方法とはジョイント栽培というやり方で、通常の1.5倍の収量と、2年早く収穫ができるということでやっております。

林 俊 幸

ますので、また朝倉にお越しの際は寄っていただいても構いません。

そのほかに輸出も数年前から取り組んでおります。ただ、数量的には少ないわけですが、最近はや安の関係で少し伸びてきておりますし、品目も多くなってきております。特に朝倉から出しておりますのが、タイですとか香港が多いという状況です。輸出金額も増えてきております。

結びになりますが、全国のJAグループでは、国消国産運動に取り組んでおります。日本は食料の6割以上を輸入に頼っておりまして、新型コロナウイルス感染症の大流行で、世界中の人々がマスクを買い求め、マスク不足が起きました。もしこれが食料だったら大変なことになっていたと思います。今、日本国内で食料を生産する大切さについて意識が高まってきております。その一方、年々高齢化が進み、農家は減ってきております。

これからも皆さんにおいしい国産の農畜産物を届けて、安心して暮らしていけるように地域

の農業を守り、日本の食卓を守るために、国産を生み出す農家と、それを食べる消費者の方々が一緒に力を合わせて、国消国産を応援していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

最後に余談になりますが、今日は皆さんにお願いがあつて参っております。最後のスライドに出ております写真が紅タデということで、お刺し身の横にワサビと一緒に付いております小さい紫の双葉です。朝倉は全国シェア80%ですが、実はコロナの影響で外食産業が下火になったということで、売り上げも半分になっています。今は外食産業もだいぶ復活してきましたが、その売り上げはまだ減ったときの状況が続いております。そういった中で、ぜひいろんな場所でお刺し身を食べる機会がありましたら、もし、この紅タデがなかったら、「ここのお刺し身には紅タデは付いていないのでしょうか」と、一言つぶやきをお願いしたいと思っております。それによって、8名の生産者が助かります。どうぞよろしく願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

経済環境の変化に対応した産地の現状

J A 筑前あさくら 営農経済担当常務理事 林 俊幸

中村学園大学 第18回国際セミナー



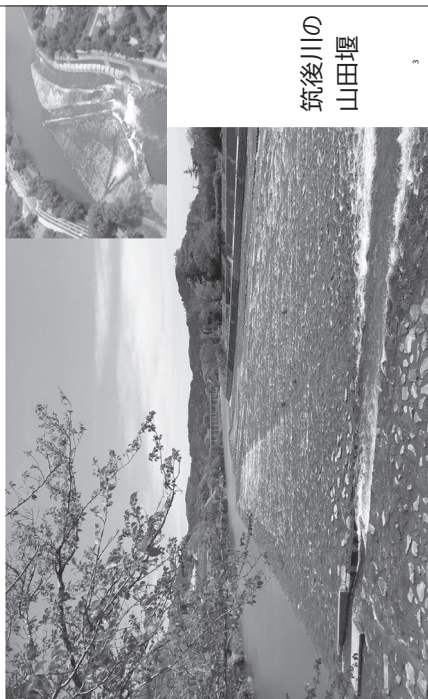
1

J A 筑前あさくらの沿革

JA筑前あさくらは、平成6年4月に7JAの合併により誕生。朝倉市、筑前町、東峰村の3市町村を管内とし、福岡県のほぼ中央に位置し果は大分県日田市に接し、福岡市からJA管内の中心部である朝倉市まで30km圏内。



2

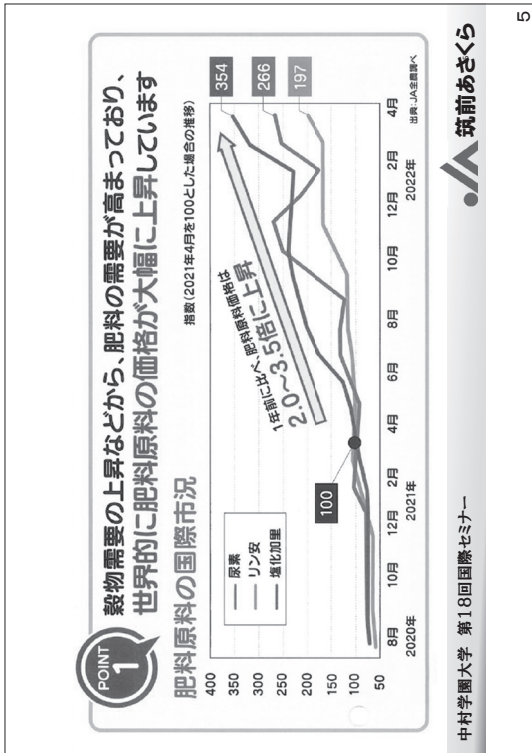


筑後川の山田堰

3

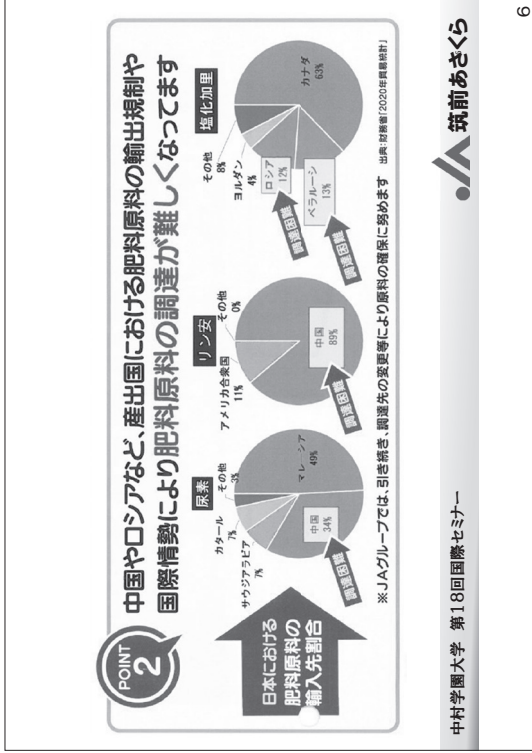


4



中村学園大学 第18回国際セミナー

5

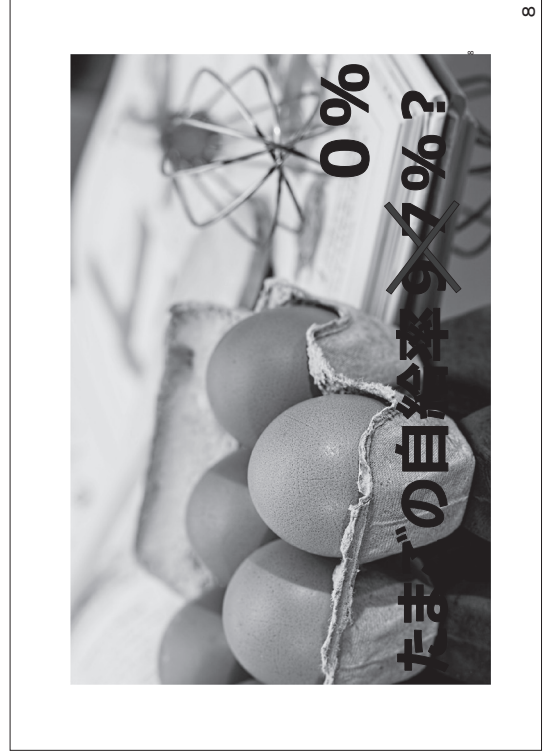


中村学園大学 第18回国際セミナー

6



7



8

農業生産現場の問題点

- ① 高齢化に伴う労働力不足
- ② 多様に富む消費者ニーズ
- ③ 新規就農者の育成（災害からの復興）

中村学園大学 第18回国際セミナー

筑前あざくら

13



中村学園大学 第18回国際セミナー

筑前あざくら

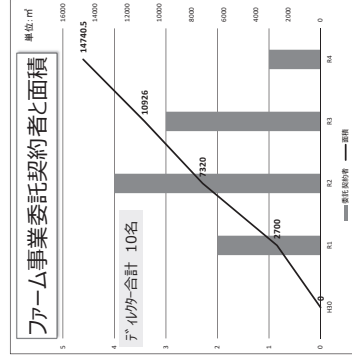
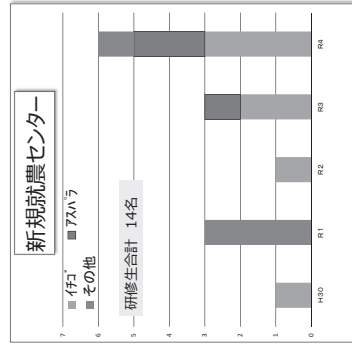
14



中村学園大学 第18回国際セミナー

筑前あざくら

15



中村学園大学 第18回国際セミナー

筑前あざくら

16

フルーツファーム事業



九州北部豪雨で被害 果樹農家復興を支援


九州北部豪雨で被害を受けた果樹農家の復興支援を目的として、本学が主催する「フルーツファーム」事業が、農家の復興支援の一環として開催された。本学が主催する「フルーツファーム」事業は、産地を支援し、産地を復興させることを目的として開催されている。本学が主催する「フルーツファーム」事業は、産地を支援し、産地を復興させることを目的として開催されている。

福岡・JA筑前あさくら ファーム事業スタート

福岡県筑前郡のJA筑前あさくらにおいて、本学が主催する「フルーツファーム」事業がスタートした。本学が主催する「フルーツファーム」事業は、産地を支援し、産地を復興させることを目的として開催されている。

中村学園大学 第18回国際セミナー

18



筑前あさくら

国消国産

こくしょうこくさん

中村学園大学 第18回国際セミナー

20

朝倉 新規就農センター



研修生3人新規就農へ

研修生3人が、朝倉の新規就農センターで研修を受け、新規就農することになった。朝倉の新規就農センターは、産地を支援し、産地を復興させることを目的として開催されている。

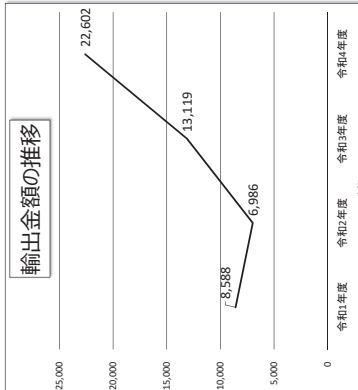
研修生3人新規就農へ

研修生3人が、朝倉の新規就農センターで研修を受け、新規就農することになった。朝倉の新規就農センターは、産地を支援し、産地を復興させることを目的として開催されている。

中村学園大学 第18回国際セミナー

17

輸出金額の推移



品名	令和1年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
桃	0	0	0	551
ぶどう	0	0	0	2,145
梨	0	0	4,944	4,714
柿	8,586	6,986	4,946	4,516
万葉なご	0	0	3,229	6,001
あまおう	0	0	0	4,675
合計	8,586	6,986	13,119	22,602

中村学園大学 第18回国際セミナー

19



朝倉の「紅たで」
全国シェア 約80%



● 筑前あざくら

中村学園大学 第18回国際セミナー

21